

国際ツーリズムをめぐるネパール地域像

International tourism and geographical images of Nepal

森 本 泉 Izumi MORIMOTO

本論文は、ネパールについての、国際ツーリズムの展開を座標軸とした地誌的研究である。通算約2年間にわたって、ツーリストエリアで繰り広げられるローカルな人々の活動について観察、聴き取り調査を行い、本論文はその調査結果の記述分析（第3部）を中心に、4つの部から構成されている。記述分析の背景となるのは、ネパールの社会的状況、及び中核-周辺連関における国際ツーリズムの展開状況（第1部）、ネパールにおける国際ツーリズムのナショナルなレベルでの展開状況（第2部）である。結語となる第4部で、第3部で検討した国際ツーリズムについてのローカルな個別具体的な事例を相対化し、そこから描き出される国際ツーリズムをめぐるネパール地域像を、従来の地域像とはまた別の像を結ぶよう、複眼的に、かつ動態的に描き出すことを試みることで本論文を閉じた。

以下では、次に示す論文構成に沿って内容を概略していく。なお、末尾の初出誌一覧に記した拙稿は、それぞれ本論文の部分に相当する。

論文構成

第1部 序

第1章 研究の目的と方法

1. 1 研究の目的
1. 2 研究の方法
1. 3 論文の構成

第2章 ネパールの地域像と社会的状況

2. 1 はじめに
2. 2 ネパールについての地誌的研究
2. 3 ネパール国家の形成と社会範疇
2. 4 まとめ

第3章 周辺における国際ツーリズムの展開

3. 1 はじめに
3. 2 周辺における国際ツーリズム
3. 3 世界システム下における国際ツーリズムの展開

3. 4 国際ツーリズムの中核-周辺連関

3. 5 まとめ

第2部 ネパールにおける国際ツーリズム

第4章 国際ツーリズムへの包摂と受容

—秘境からシャングリラの再構築へ—

4. 1 はじめに

4. 2 国際ツーリズムの黎明期

4. 3 ツーリズムの展開

4. 4 シャングリラ・イメージの再構築

4. 5 商品化に揺れるヒマラヤ

4. 6 まとめ

第5章 ツーリズム政策と開発をめぐる問題

5. 1 はじめに

5. 2 ツーリズム開発とその背景

5. 3 ネパールにおける国際ツーリズムの展開状況

5. 4 ビジット・ネパール・イヤー1998の実施とその効果

5. 5 まとめ

第3部 ツーリズムの展開

第6章 場所のツーリズム化

—首都カトマンドゥのタメルを事例に—

6. 1 はじめに

6. 2 場所の商品化

6. 3 地名から探るタメルの来歴

6. 4 カトマンドゥの都市的發展

6. 5 ツーリストエリアの展開

6. 6 まとめ

第7章 ホテル産業をめぐる企業家の活動

7. 1 はじめに

7. 2 国際ツーリズムと企業家

7. 3 ネパールにおける企業家とホテル産業

7. 4 カトマンドゥにおけるホテル産業の展開

7. 5 タメルにおけるホテルの集積と企業家

7. 6 ホテルの経営状況

7. 7 まとめ

第8章 ツーリズムにおけるインフォーマルな経済活動と社会構造変化

—ガンダルバの路上活動を事例に—

8. 1 はじめに
8. 2 ガンダルバをめぐる社会的状況
8. 3 「出稼ぎ」への経緯
8. 4 「出稼ぎ」の日常生活
8. 5 まとめ

第9章 ツーリズムと文化の商品化

—チベット人難民と楽師カースト, ガンダルバを事例に—

9. 1 はじめに
9. 2 ネパールにおける社会的状況
9. 3 文化の商品化
9. 4 土産物販売をめぐる文化の商品化
9. 5 まとめ

第4部 結語

第10章 結語

序としての第1部では、本論文が依拠する概念的枠組みの検討を行なった。まず、第1章では本論文がネパールにおいて国際ツーリズムの展開をめぐって繰広げられる現象から、ネパール地域像を描こうとする地誌的研究であることを表明した。

ネパールは20世紀半ばに公式に「開国」した。それ以来、主に欧米諸国や日本からの登山家や研究者、観光客等によってネパールの地域像が構築されてきた。近年、このようにグローバルなレベルで構築されてきたネパール地域像に対し、ネパール人の学者からロマンティズムに対する批判というかたちで異議申し立てが行われるようになった。その背景にあるのは、カーストや民族、宗教、居住地等によって社会を分節化するジャートという社会的範疇が混淆しているネパールの現在の多民族的状況である。すなわち、多民族的状況において、特にヒマラヤに居住するモンゴリアンに外国人の目が向けられ、モンゴリアンの文化がネパールの地域像に投影されてきたのに対し、高位カーストの人々は看過されるか、あるいはモンゴリアンを抑圧するものとして描かれてきた。このことが、高位カーストの人々に不満を抱かせるようになったのである。ネパールの人々の活動を方向づける社会的背景としての多民族的状況がいかに形成されてきたのか、その過程を歴史的に検討し、ネパール社会を分析する視点として、そ

の過程で創り出されてきた階層的な社会範疇であるジャートが有効であることを示した。この作業は、ネパール社会を概観するだけでなく、第3部の記述分析のための準備作業でもあった。

続く第3章では、地域像を描く座標軸である国際ツーリズムの展開状況を、ウォーラステインの世界システムにおける中核—周辺連関において検討した。この作業から、ネパールが世界システムにおいて何重にも周辺化されていることが確認された。この周辺化の契機となる国際ツーリズムの展開は、地域を世界システムに観光客エリアとして包摂していく過程でもある。その過程で、国際ツーリズムの展開によって包摂された地域に資本主義の浸透を促すと同時に、ローカルな人々の価値観や活動を変化させていることを指摘した。しかしながら、この過程はグローバルな力が地域を一方向的に包摂するかたちで進行するのではなく、ローカルな人々の受容や抵抗を同時に生じるものである。つまり両者の相互作用の結果、地域は創り出されるのである。このようなローカルなレベルでの地域の創出過程は、第3部の具体的事例についての記述分析が例証するところである。

ナショナルなレベルにおいてネパールの国際ツーリズムについて検討した第2部では、ネパールが観光客・デスティネーションとしていかに創り出され、その過程でネパールがいかに対応してきたのかに焦点が定められる。まず、エヴェレスト登山を契機に始まったネパールの国際ツーリズムの展開過程で、グローバルな言説を通じてシャングリラ・イメージがネパールに重ねられてきた経緯を歴史的に概観した。現在では、ツーリズムに限らず開発が進むにつれ環境破壊が深刻化している。その楽園的なシャングリラ・イメージにネパールの国際ツーリズム・イメージが規定されているが為に、困難な状況に直面している。つまり、環境破壊が深刻化している今日、シャングリラ・イメージにふさわしくないとしてグローバル・レベルでそのイメージが否定されているのである。これに対して、ネパールはシャングリラを恰も本質的なものとして再構築し、商業的に利用しようとしている段階にあるのだが、その試みがグローバル・レベルに達していないのが現状である(第4章)。

このような困難な状況に直面してはいるが、ネパール政府は一貫してネパールの基幹産業として

ツーリズム産業を位置付けている。「開国」当初は、国際ツーリズムに限らず、外国が経済的、知的、技術的援助を通してネパールの開発政策に関与してきた。今日ではネパール政府が主体的に開発計画を策定しているが、その計画の中で外国資本を積極的に導入することを試みるなど、対外的な関係を却って強化している。他方、環境破壊等の問題に対して持続可能性という観点から、保全地域や国立公園が数多く設置されてきた。その結果、従来そこで生活してきたローカルな人々の行動を規制する事態も生じている。グローバルな国際ツーリズムの展開とは無関係に生じているわけではない環境破壊等のローカルな問題群は、結局はローカルな人々の責任に帰せられている状況にあるといえる（第5章）。

本論文の中心をなす第3部では、特に首都カトマンドゥにあるツーリストエリア、タメルにおけるローカルな人々のツーリズムをめぐる活動に着目し、人々がいかに国際ツーリズムの展開に対応しているのか、実態に即してそこに見出される現象を記述分析した。まず、タメルがツーリストエリアとして形成する過程を、場所の商品化概念を援用しながら明らかにした。国際ツーリズムの展開に伴い場所がツーリストエリアとして商品化される過程で、特に近年、タメルに伝わる伝説等がグローバルなレベルで読替えられ、外国人ツーリストに語られるようになった。そして、たとえばシャングリラやヒッピーというようなネパールに付与されてきたイメージも取り込みながら、重層的なイメージをもつ場所としてツーリストエリア、タメルは創り出され、拡大を続けているのである（第6章）。

そのタメルをツーリストエリアとして形成してきたエージェントについて、ホテル産業をめぐる活動する企業家に着目し、彼ら彼女らの活動実態をタメルにおけるホテル産業の展開に沿いながら明らかにしたのが第7章である。タメルのホテル産業で重要な役割を果たしてきたカトマンドゥを故地とするネワール、チベットに接する山地に位置するマナン出身のグルン、1959年を境にネパールに移住してきたチベット人、20世紀半ばまでネパールで専制政治を敷いてきたラナー族等のジャートを事例として取上げ、其々の文化的背景を其々の企業活動の特徴に関連づけて考察した。その結果、参入時期の違いもあるが、たとえば交

易や宗教というような自らの文化を適応させながらその文化的再定義を行ないつつ、企業家として成長してきたことが明らかにされた。このように国際ツーリズムの展開過程で析出されたタメルの企業家は、一方的に国際ツーリズムに包摂されるのではなく、それを利用しながら自らの空間を創り出しているのである。

フォーマルな経済活動であるホテル産業に対し、第8章ではツーリストエリアの路上でインフォーマルな経済活動を行なう楽師カースト、ガンダルバの「出稼ぎ」者に着目し、その活動実態を記述分析した。ガイネという呼称が汎用的であるが、彼らはカースト的な差別的偏見が染み付いたガイネを名乗ることを避け、ガンダルバを名乗っている。そのガイネとは1963年に法律で禁止されるまで不可触に位置付けられてきたカーストを指示する名称であり、現在でもローカルな対人関係において不可触の扱いを慣習的に受けている。村々をガンダルバに特有の四弦弓奏楽器サランギを弾き語りながら生活の糧を得ることを主な生業としてきたが、近年、ツーリストエリアの路上でサランギを土産物として外国人ツーリストに売られるようになった。外国人との直接的なやりとりや資本主義的な活動を通じて、彼らは行動様式や価値観を変化させてきた。具体的には、楽器として弾いていたサランギを商品として売り、生産するようになり、これらの行為を通じて、ヒンドゥー的なヒエラルキカルな社会における価値観とは異なる資本主義的な価値体系を受入れるようになった。そして、(元)不可触カーストとしてではなく、また別の人生を送る可能性を彼ら自身が感じ、実践しつつあることを指摘した。

続く第9章では、第8章で取り上げたと同様に、インフォーマルな経済活動を行うチベット人難民と(元)不可触カースト、ガンダルバの事例を取り上げ、文化の商品化概念を援用しながら彼ら彼女らの路上での土産物販売をめぐる活動を検討した。具体的に行った作業は、彼ら彼女らが土産物の販売を通じて語り、振舞う文化をめぐる読み取れるネパールの文化的状況を切り取り、呈示することであった。その結果、両者とも、国民国家ネパールというナショナルなスケールを前提としてしか文化を語り得ない状況にあり、そしてその状況は動態的で、複眼的な様相を呈していることが示された。そしてそのナショナルな枠組みもま

た、グローバル化により、かつまたグローバル化の影響を受けたローカルな人々から揺さぶられている状況にあり、絶対的なものではないことが明らかにされた。

結語として、第4部の最終章ではネパールにおける国際ツーリズムの展開に伴って生じている諸現象(第3部)を相対化し、そこから描かれ得るネパール地域像がこれまでにグローバルなレベルにおいて構築されてきた地域像、例えばシャングリラ・イメージと連動しながら再構築されてきたことを示した。

国際ツーリズムをめぐるローカルな現象は、須く国際ツーリズムの展開への、乃至グローバル化へのローカルなレベルでの対応の過程であった(第3部)。また、ローカルで生じている現象は、グローバルな国際ツーリズムの展開によって空間が差異化、階層化される過程で生じている現象に他ならない。すなわち、ローカルな現象はグローバルな現象のまた別の側面なのである。そして、これらの現象は、グローバルとローカルなレベルを媒介するナショナルな枠組み、すなわち国民国家ネパールのイデオロギーを介して生じるものであった。ただし、その国民国家という枠組みは、ネパールの人々にとって同様に機能するような絶対的な枠組みではなく、むしろ人々の活動によって揺るがされてしまうようなものなのである。

本論文は国際ツーリズムを座標軸としてネパール地域像を描こうとする、ネパールについての地誌的研究であることを目指したものであった。ローカルな人々の活動を、グローバル、ナショナルなレベルで検討する為に、ウォーラーステインの世界システム論やテイラーの三層の空間的スケールを徹底する視座として援用した。当面はこの世界システム論からネパールを捉え、国際ツーリズムという座標軸以外からも、より多様で立体的な地域像を複眼的に描いていく可能性を模索していくことを課題としたい。

初出誌一覧

森本泉 (1995) : 途上国・途上地域におけるツーリストエリアの形成—ネパール・ポカラのダムサイドを事例に—。お茶の水女子大学大学院人文科学研究科提出修士論文。

森本泉 (1998) : ネパール・ポカラにおけるツーリスト

エリアの形成と民族「企業家」の活動。地理学評論, 71A, 272-293.

森本泉 (1999) : 国際ツーリズムにおける「文化の商品化」とアイデンティティー—ネパール, ポカラにおけるチベット人家族を事例として—。人間文化論叢, 1, 35-43.

森本泉 (1999) : 再構築されるネパールの地域像/自画像—「ガイネ」から「ガンダルバ」へ—。平成9~10年度 科学研究費補助金[基盤研究B] (研究代表者お茶の水女子大学 熊谷圭知)「第三世界の地域像の再構築と地誌記述の革新」報告書, 119-134.

森本泉 (1999) : あるツーリストエリアの系譜—ネパール, カトマンドウの「タメル」を事例に—。お茶の水地理, 第40号, 39-46.

森本泉 (1999) : Visit Nepal Year 1998の成果とその後。日本ネパール協会会報, No. 156, 10-11.

森本泉 (1999) : ネパールにおける国際ツーリズムの発展。日本観光研究学会全国大会研究発表論文集, No. 14, 241-246.

森本泉 (2000) : ネパール地域像の再構築—楽師カースト集団ガンダルバの表象と実践—。熊谷圭知・西川大二郎編「第三世界を描く地誌 ローカルからグローバルへ」, 古今書院, 131-148.

森本泉 (2000) : ツーリズムの展開から見たカトマンズ・タメル—ホテル業の変化。(社)日本ネパール協会編, 「ネパールを知るための60章」, 明石書店, 22-24.

森本泉 (2000) : 旅の吟遊詩人から「出稼ぎ者」へ—ネパールの楽師カースト ガンダルバの国際ツーリズムへの包摂—。旅の文化研究所研究報告, No.9, 161-171.

もりもと・いずみ

1995年4月お茶の水女子大学大学院・人間文化研究科比較文化学専攻入学

2001年4月より明治学院大学一般教育部専任講師

izumim@gen.meijigakuin.ac.jp